

平成17年度
老人保健健康増進等事業
による研究報告書

平成17年度 研究報告書

「パーソン・センタード・ケアとDCM(認知症ケアマッピング)法」の研修およびネットワーク作りに関する研究事業

社会福祉法人 仁至会
認知症介護研究・研修大府センター

4年間を振り返って

平成 14 年度後半、DCM (Dementia Care Mapping; 認知症ケアマッピング) 法の導入事業を始めたとき、我々は、パーソン・センタード・ケアについても、DCM 法についても、全く無知であった。DCM 法を音楽療法や回想法などの非薬物療法の評価指標とっていたし、DCM 法を行うためには、研修を運営しなければならないと聞くと、海外の研修を受講しに行き、その風景をビデオに収録してくれば、日本ですぐに講師として研修を行えると思っていた。パーソン・センタード・ケアの理念については、「パーソン＝(認知症の)人」だろうから、とにかく、認知症の人のために全力を尽くしてケアを行うことだろうと短絡的に思っていた。今となっては、恥ずかしい限りであるが、当時の理解には限界があり、「パーソン・センタード・ケアと DCM 法」の全貌を把握するには程遠いものがあつたのである。まるで、「暗闇で、巨象の体の一部をさわり、象とは何かを語っていたような状態」であつた。

ともかくも、翌平成 15 年度に第 1 回の「パーソン・センタード・ケアと DCM 法」基礎コースを主催するために、翻訳などに取り組んだ。日本で行われてもそのコースを受講すれば、海外と同等の資格を取得でできることから、当時私は、海外で受講する場合と同様な受講料(400 英国ポンド、約 8 万円)を徴収すべきと思っていた。しかし、当時の厚生労働省老健局の担当官に「すぐ海外と同様に、完成された研修は提供できないでしょう。研究事業を通して完成させればよい。その意味では、受講生も、協力者であるから、徴収する必要はない」という意見をいただいた。今思えば卓見である。その予想通り、最初は、マニュアルと呼ばれるテキストを翻訳すれば、すぐにでも研修が行えると思つたが、次から次へと乗り越えなければならない課題が見えてきて、コースを日本人だけで独自運営するという目標は、かなり高いハードルであることが徐々にわかってきた。まさしく、巨象の一部を触りながら、その都度、これが全貌だと思ひながら過ごしてきたのである。やつと、4年間を経て、巨象の全部とはいえないが、大枠は見えてきたといった感じだろうか。

そして、計画がスタートして約 3 年半を経過した、今年度末に、ようやく日本人で初めての、「パーソン・センタード・ケアと DCM 法」の基礎認定トレーナーが生まれ、その後続く、トレーナー候補生(見習いトレーナー)が勉強するための指導要綱(トレーナーズ・パック)の日本語版が完成した。今までに 3,000 名を超えるマッパーを育ててきた本場英国でも 12 名しかいない、認定トレーナーが生まれ、日本で独自に研修が行える準備が整つたのである。

しかし、この間にも世界情勢は変化している。既存の DCM 法をさらに進化させた、あたらしいバージョンに移行することが、ドイツで昨年開かれた、DCM

法国際会議で決まり、今年から、順次、更新される方針が確認されたのである。また、アジアに目を向けると、今までは、日本がアジアで唯一の DCM 導入国であったが、韓国が平成 18 (2006) 年の夏に導入を決め、2007 年には、中国が認知症ケアに関する初めての国際会議を開き、DCM を取り上げる予定であると聞く。パーソン・センタード・ケアと DCM 法の導入に関して、日本の果たす立場は大きい。今までは、大府センターを中心とした比較的狭い枠組みの中の活動であったが、今後は、日本はおろか、アジア諸国とも広く連携をしていくことが望まれる。

平成 18 年 3 月

認知症介護研究・研修大府センター
客員研究員 水野 裕

「パーソン・センタード・ケアと DCM（認知症ケアマッピング）法」
の研修およびネットワーク作りに関する事業
目次

1. DCM 採用諸国との交流	
A. DCM 国際会議 -----	1
① 国際会議の概要：水野 裕	
② 議事メモ：村田康子・水野 裕	
③ 各国の現状（スライドおよびレポート）	
・ オーストラリア（Virginia Moore）	
・ デンマーク（Dr Eva Bonde Nielsen）	
・ ドイツ（Christian Mueller-Hergl）	
・ 日本（水野 裕・村田康子）	
・ ポルトガル（Patricia Paquete）	
・ スペイン（Elena Fernández、Josep Vila Miravent）	
・ 米国（Dr Roseann Kasayka）	
・ フィンランド（Päivi Topo）	
④ DCM 法国際会議に参加して：村田康子	
B. 第 8 版への移行：水野 裕	
C. 国際 DCM 総会：水野 裕	
2. 翻訳作業 -----	76
3. 第 4 回基礎コース -----	78
A. コースの概要：水野 裕	
B. 見習いトレーナーとして：	
①初めての Apprenticeship：村田康子	
②ベーシックコース、トレーナー実習生（見習いトレーナー）としての参加報告書：中村裕子	
4. 地域のネットワークについて—DCM 研修後のマッパーフォローアップのための取り組み—：日比野千恵子 -----	87
5. まとめ～今後の展望～：水野 裕 -----	104
6. 日本のマッパーたちの活動・研究 -----	111
7. 資料（最近の出版物の中から）-----	147